平成二十六年四月十日発行
皇學館論叢第四十七巻第二号　抜刷

研究ノート

『枕草子』官職名の〝ずれ〟に隠された意図

内野　美貴子

皇學館論叢　第四十七巻第二号
平成二十六年四月十日

研究ノート

『枕草子』官職名の〝ずれ〟に隠された意図

内野　美貴子

□ 要　旨

『枕草子』に描かれる登場人物の官職名と『公卿補任』等の記述の〝ずれ〟について、本作品独自の方法の面から再検討した。

従来、両者の〝ずれ〟は、作者清少納言のミス、あるいは本作品の伝来過程における誤写等によって生じたものと捉えられてきた。しかし、こうした〝ずれ〟は中関白家の没落以後と推定される章段にしか認められないことから、①官職名にまつわる〝ずれ〟は、清少納言が意図的に作り出したものであり、②その方法は、従来指摘されてきた本作品独自の方法（中関白家没落以後も、その事実に直結する記述を回避する）と不可避な関係なものであることを明らかにした。

□ キーワード

推定年時　公卿補任　中関白家　『枕草子』の方法

一　はじめに

『枕草子』という作品は、文学研究をする上でとても読みにくい作品である。伝本によって、その本文はもちろんのこと、章段数や章段の順序さえが異なっているためである。従来、こうした差異は、後人による手直しや誤写、作者のミスによるものと考えられてきた。

『枕草子』における最も基本的な研究方法の一つに、登場人物の官職名をもとに、その章段の年時を確定するというものがある。まず①官職名と『公卿補任』の記述の照合を行い、その

結果をもとに②各章段の年時を特定していく。現在出版されている注釈書に見られる年時の記述は、すべてこうした手順のもとに導き出されたものである。

しかし、こうした方法には限界があるようである。というのも、『枕草子』の中には、たとえ官職名をもとに年時を確定しようとしても、できない章段があるからだ。その一例が、『枕草子』七九段「里にまかでたるに」の段である。

【A】里にまかでたるに、殿上人などの来るをも、やすからずぞ、人々はいひなすなる。いと有心にひき入りたるおぼえ、はたなければ、さいはむも憎かるまじ。また、昼も夜も、来る人を、なにしにかは、「なし」とも、かがやき返さむ。まことにむつまじうなどあらぬも、さこそはめぐれ。あまりうるさくもあれば、「このたび、いづく」と、なべてには知らせず、a左中将経房の君・b済政の君などばかりぞ、知りたまへる。c左衛門の尉則光が来て、物語りなどするに、「昨日、d宰相の中将（＝藤原斉信）のまゐりたまひて、『妹のあらむところ、さりとも知らぬやうあらじ。いへ』と、いみじう問ひたまひしに、さらに知らぬ由を申ししに、あやにくに強ひたまひしこと」などいひて、……

（上巻・一七四～五頁）

この段で登場する人物は、a「左中将経房の君」、b「済政の君」、c「左衛門の尉則光」、d「宰相の中将」の合計四人である。

この章段を先の方法を用いながら読み解いていくと、ある矛盾が存在していることに気づく。官職名が挙げられている三人acdの［官職名―就任期間］を見ていくと、a「左中将経房の君」のみが他の二人の就任期間と一致しない。

従来、こうした用例は、次のように処理されるのが一般的であった。

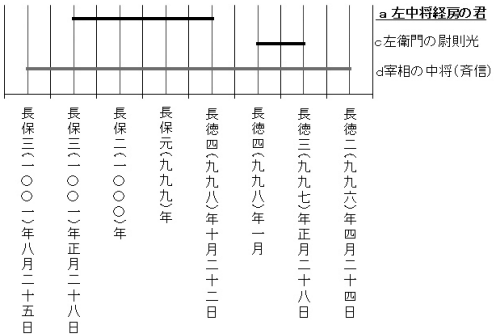
▼『新潮日本古典集成』頭注四

経房は長徳二年七月二十一日右近衛権中将に任じ、同四年十月二十二日左近衛権中将に転じているから、長徳二年初秋の史実としては、第百三十六段の「右中将」が正しく、もし本段の「左中将」に本文誤謬がないとすれば、作者が誤って後の官称を用いたと見なければならない。

（上巻・一七四頁）

c則光が「左衛門の尉」に就いていたのは、長徳三（九九七）年正月二十八日から長徳四（九九八）年一月までのことであるし、d藤原斉信が「宰相の中将」と呼ばれたのは、長徳二（九九六）年四月二十四日から長保三（一〇〇一）年八月二十五日までである。このようにa「左中将経房の君」のみがcdの［官職名―就任期間］から外れているのである（【表一】参照）。

【表一】



しかし、こうした〝ずれ〟は、本当に「作者の誤り」なのだろうか。それとも、「なんらかの意図にもとづいて、あえてそのように書いた」のであろうか。

このような年時と官職名の〝ずれ〟は、日記的章段の中でもある時期を境に頻出している。ならば、その時期とは、いつなのか。そして、そこに隠された意図とはどのようなものなのか。本稿では官職名の〝ずれ〟が意味するところを考えていきたい。

二　官職名に〝ずれ〟のある章段、ない章段

『枕草子』計二九八の章段のうち日記的章段とよばれるものは計六〇段ある。そのうち年時に関わる章段は計一九段あり、『枕草子』官職名の〝ずれ〟に隠された意図（内野）〝ずれ〟のない章段は計一〇段、〝ずれ〟のある章段は計九段ある。[注1] この作品内では、〝ずれ〟のない章段とある章段がほぼ半々である。

では、まずは〝ずれ〟のない章段から見ていこう。

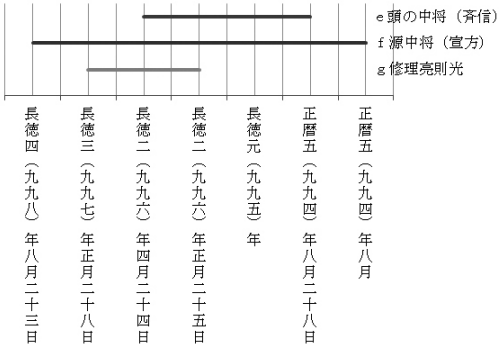
次の用例は、七七段「頭の中将の、すずろなるそら言をききて」の段である。

【B】e頭の中将（＝藤原斉信）の、すずろなるそら言をききて、いみじういひおとし、「『なにしに、人と思ひ、褒めけむ』など、殿上にて、いみじうなむのたまふ」と、きくにも恥づかしけれど、……みな寝て、つとめて、いと疾く局に下りたれば、f源中将（＝源宣方）の声にて、「ここに、『草の庵』やある」と、おどろおどろしくいへば、……「いとわろき名の、末の世まであらむこそ、口惜しかなれ」といふほどに、g修理亮則光、「いみじき慶び申しになむ、『上にや』とて、まゐりたりつる」といへば、……

（上巻・一五九～六五頁）

この段で登場するe「頭の中将」、f「源中将」、g「修理亮則光」の［官職名―就任期間］を見てみよう。e藤原斉信が「頭の中将」であったのは、正暦五（九九四）年八月二十八日から長徳二（九九六）年四月二十四日までである。f源宣方が「源中将」であったのは、正暦五（九九四）年八月から長徳四（九九八）

【表二】



年八月二十三日まで、g則光が「修理亮」であったのは長徳二（九九六）年正月二十五日から長徳三（九九七）年正月二十八日までである。つまり、e f gの三人が当該官職に就任しているという条件を満たしている期間は、長徳二（九九六）年正月二十五日から長徳二（九九六）年四月二十四日までとなり、当該章段はこの期間の出来事を描いたものと推定することができる（【表二】参照）。

先にも述べたように、『枕草子』における約半分の章段に関しては、［官職名―就任期間］に〝ずれ〟が認められない。しかし、残りの半分の章段には、なぜか〝ずれ〟が生じてしまっている。

例えば、次の章段を見てみよう。これは、先の【B】と同じ人物が登場しながらも〝ずれ〟が生じてしまっている一五四段「故殿の御服の頃、六月の晦の日」の段である。

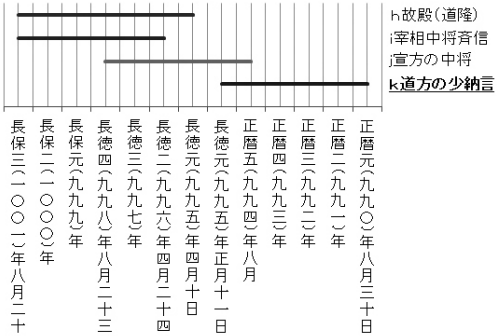
【C】h故殿の御服の頃、六月の晦の日、大祓といふ事にて、宮の出でさせたまふべきを、職の御曹司を「方悪し」とて、官のつかさの朝所に渡らせたまへり。……i宰相中将斉信・j宣方の中将・k道方の少納言など、まゐりたまへるに、人々出でて、ものなどいふに、ついでもなく、「明日は、いかなる言をか」といふに、いささか思ひまはし、とどこほりもなく、「人間の四月をこそは」と、いらへたまへるが、いみじうをかしきこそ。……

（下巻・三七～九頁）

登場人物はh「故殿」、i「宰相中将斉信」、j「宣方の中将」、k「道方の少納言」である。なお、i jの二人は、【B】にも登場していた人物である。

では、［官職名―就任期間］を見ていこう。まずh「故殿」は、藤原道隆で、「故」とあることから、期間としては道隆が亡くなった長徳元（九九五）年四月十日以降だということがわかる。i斉信が「宰相中将」と呼ばれたのは、長徳二（九九六）年四月二十四日から長保三（一〇〇一）年八月二十五日まで。j宣方については既に述べたとおりである。これら三人の［官職名―就任期間］については、長徳二（九九六）年四月二十四

【表三】



日から長徳四（九九八）年八月二十三日までにおいては条件を満たしており、〝ずれ〟は認められないといえる。

しかし、問題はk「道方の少納言」にある。道方が「少納言」であるのは、正暦元（九九〇）年八月三十日から長徳元（九九五）年正月十一日まで。つまり、道方の少納言就任期間と、先の三人の就任期間には明らかな〝ずれ〟が生じていることがわかるのである（【表三】参照）。

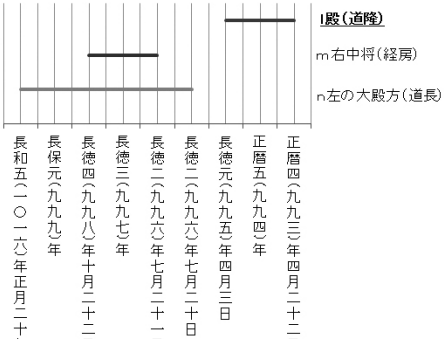
同様の例を、もう一例見てみよう。次の用例は、一三六段「殿などのおはしまさで後」の段である。

【D】l殿（＝藤原道隆）などのおはしまさで後、世の中に事出で来、騒がしうなりて、宮もまゐらせたまはず、小二条殿といふところにおはしますに、何ともなく、うたてありしかば、久しう里にゐたり。御前渡りのおぼつかなきにこそ、なほ得堪へてあるまじかりけれ。m右中将（＝源経房）おはして、物語りしたまふ。……げに、「いかならむ」と、思ひまゐらする御気色にはあらで、さぶらふ人たちなどの、「n左の大殿方（＝藤原道長）の人、知る筋にてあり」とて、さしつどひものなどいふも、下よりまゐる見ては、ふといひやみ、放ち出でたる気色なるが、見ならはず憎ければ、……

（上巻・三二二～四頁）

登場人物は、l「殿」、m「右中将」、n「左の大殿方」の三人である。

【表四】



m経房が「右中将」だった期間は、長徳二（九九六）年七月二十一日から長徳四（九九八）年十月二十二日までであり、n道長が「左の大殿」であるのは、長徳二（九九六）年七月二十日から長和五

『枕草子』官職名の〝ずれ〟に隠された意図（内野）

（一〇一六）年正月二十九日まで。つまり、ｍｎの就任期間からこの章段の年時を推定すると、長徳二（九九六）年七月二十一日から長徳四（九九八）年十月二十二日までとなるはずである。

しかし、この章段に関しても、明らかな〝ずれ〟が存在している。問題はｌ「殿（＝藤原道隆）」にある。先の【Ｃ】では道隆は「故殿」と表記されていたのに対して、【Ｄ】ではｌ「殿」とあるのみで「故」の文字がない。このことから、期間としては道隆が亡くなる以前の正暦四（九九三）年四月二十二日から長徳元（九九五）年四月三日までとなる。つまり、もし仮に道隆の表記が「故殿」であったならば問題はないものの、「殿」とあるがゆえに、先のｍｎから導き出される期間に対して、明らかな〝ずれ〟が生じてしまうのである（【表四】参照）。

ちなみに、【Ｄ】以外の章段で「殿」という表記が使われている章段が二つある。九九段「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどのことなど」の段と、二六〇段「関白殿、二月廿一日に、法興院の積善寺といふ御堂にて」の段である。どちらの段も〝ずれ〟のある章段だが、いずれも問題となる人物は「殿」（＝藤原道隆）ではないため、この表記で問題はないということになる。それだけに【Ｄ】の章段でのｌ「殿」という表記には、何かしらの意図が隠されているように思えてならないが、今はこれ以上のことはひかえておこう。

さて、ここで問題にしたいのは、なぜ、章段によって、こうした〝ずれ〟が生じているのかということである。

先にも述べたように、〝ずれ〟の原因として考えられるものとして、第一に挙げられてきたのは、作者のミスというものであった。そして、その次に挙げられてきたのは〈通称〉に関わるものであった。

▼『新潮日本古典集成』頭注九

長徳二年四月二十四日、内大臣から大宰権帥に貶せられ、同三年三月二十三日に召還の官符を受け、同年十二月に帰京したから、正確には「前の内大臣殿」とか「帥殿」というべきであるが、当時も「帥内大臣」と通称せられていたから、差支えはない。（上巻・二三五頁）

▼『同』頭注一〇

当時従二位権大納言中宮大夫の二十九歳。『枕草子』の執筆が、道長が氏長者として時の一人であった頃に相当するので、「殿」という敬称を用いたのであろうか。（上巻・二九一頁）

つまり、作者は当該年時における官職名ではなく、あえて〈通称〉を用いたのではないかということである。しかし、【Ｂ】と【Ｃ】の例をみればわかるように、同じ人物が登場している場合でも、年時にあわせて官職名が使い分けられており、［官

職名―就任期間」は、本作品の基本的な法則であるように思われるのである。少なくともこの法則に例外を認めるならば、「官職名―就任期間」から年時を推定していくという方法自体が無意味なものとなることは間違いない。

さて、わたしは本稿の冒頭で、官職名の〝ずれ〟は日記的章段の中でもある時期を境に頻出している、と述べた。ならば、その「年時」とはいつなのか。

結論から述べる。それは、長徳二（九九六）年四月である。つまり、これまで述べてきた〝ずれ〟は、すべての日記的章段に見られるものではなく、長徳二（九九六）年四月以降（正確に言えば、従来、長徳二（九九六）年四月以降のものと推定されてきた）章段に限られているのである。

もう一度、ここまでで挙げた用例の年時を振り返ってみよう。

【A】「里にまかでたるに」の段は、cd二人の官職就任期間から長徳三（九九七）年正月二十八日から長徳四（九九八）年一月まで。

【B】「頭の中将の、すずろなるそら言を聞きて」の段で、efg三人の人物の官職就任期間が一致しているのは長徳二（九九六）年正月二十五日から同年四月二十四日まで。

【C】「故殿の御服の頃、六月の晦の日」の段は、官職就任期間が一致しているhij三人の人物から長徳二（九九六）年四月二十四日から長徳四（九九八）年八月二十三日まで。

【D】「殿などのおはしまさで後」の段は、mn二人の官職就任期間から長徳二（九九六）年七月二十一日から長徳四（九九八）年十月二十二日までであることが分かる。

このように、官職名の〝ずれ〟は、長徳二（九九六）年四月以降のものであることがわかるのである。――官職名の〝ずれ〟は、長徳二（九九六）年四月以降を境に頻出するものであった。――興味深く思われるのは、長徳二（九九六）年四月が、中関白家にとって非常に重要な意味を持つ年時であるということ。そして、これまで考察してきた官職名の〝ずれ〟という現象は、従来の『枕草子』研究でもたびたび指摘されてきた、本作品特有の、ある方法と極めて密接な関係にある、ということなのである。

三　官職名の〝ずれ〟の意味

中関白家にとって、長徳二（九九六）年四月は、それまでの栄華から没落へと変わる分岐点となる年時であった。

では、中関白家の栄華の終焉となった時期と出来事をおさえておこう。中関白家の没落のきっかけとなったのは、長徳元

（九九五）年四月十日、関白殿と呼ばれた藤原道隆の崩御である。道隆薨去にともない権力の流れは中関白家からそれていき、暗い雰囲気が漂い始める。そして中関白家の没落を決定づけたのが、翌年四月の、花山法皇暗殺未遂事件を起こした藤原伊周・隆家の左遷であった。父親である道隆の後ろ盾がなくなり、兄と弟が罪人という立場になった中宮定子の生活は一変する。長徳二年四月とは、道隆の死からはじまった中関白家の没落と、華やかだった中宮定子の後宮の衰退が明確となった分岐点ともいうべき年時であった。

従来の研究によって既に明らかにされているように、長徳二年四月以降の章段では、「暗さ」を感じさせず殊更明るい表現を使って描かれている。これこそが『枕草子』という作品の本質とも言える。

こうした『枕草子』の本質をわかりやすく表している章段を見ておこう。九四段「五月の御精進のほど、職におはしますころ」の段である。

【E】五月の御精進のほど、職におはしますころ、塗籠の前の二間なるところを、殊にしつらひたれば、例ざまならぬも、をかし。朔より、雨がちに曇りすぐす。……「o左近の中将（＝藤原斉信・藤原正光）、みな着きたまふ」といへど、さる人も見えず、六位など、立ちさまよへば、「ゆかしからぬことぞ。はやく過ぎよ」といひて、いきもてゆく道も、祭のころ思ひ出でられて、をかし。かくいふところは、p明順の朝臣の家なりける、「そこも、いざ見む」といひて、車寄せて、下りぬ。……人に語らせてこそやまめ」とて、一条殿のほどにとどめて、「q侍従殿（＝藤原公信）やおはします。郭公の声ききて、今なむ帰る」といはせたる使、「『ただ今まゐる。しばしあが君』となむ、のたまへる。……「いと心やすくなりはべりぬ。いまは、歌のこと思ひかけじ」などいひてあるころ、「庚申せさせたまふ」とて、r内の大臣殿（＝藤原伊周）、いみじう心設けせさせたまへり。……　（上巻・二二二～二三七頁）

この章段を簡単に説明すると、①明順山荘訪問②中宮定子の詠歌御免③庚申待の夜の伊周との問答、というものである。

この章段は、一見、清少納言を含めた女房たちが定子の許可を得てほととぎすの声を聞きに出かけ、歌を詠む、詠まないとたわむれる日常的な風景を綴っただけのように思える。しかし実際はそれほどほのぼのとしたものではない。

この章段の舞台となっている「職」とは「職の御曹司」を指している。定子が「職の御曹司」に移住していたのは道隆没後の長徳元（九九五）年と、長徳三（九九七）年六月から長保元（九九九）年までとされている。つまり「職の御曹司」という

場所は、長徳元（九九五）年四月十日、藤原道隆死去にともなう中関白家の没落、長徳二（九九六）年四月の藤原伊周・隆家兄弟の左遷という暗い時期と一致しているのである。それにもかかわらず、この章段を読む限り、そうした暗さは全く感じられない。その理由は、作者清少納言が、読者に対して、あえてそうした暗さを感じさせないように描いているからである。

こうした『枕草子』の手法については、既に三田村雅子によって詳細に論じられているところでもある。

これらの（『職の御曹司におはしますころ』ではじまる）章段では、中関白家の不遇に反比例するように、女房たちの明るい賑やかな行動がとりあげられ、幸福だった時代以上に「笑ひ」が頻出する。[注2]

中関白家の没落と反比例するように「をかし」や「笑い」が頻出するという現象は、この章段に関しても例外ではなく「をかし」は計五回、「笑ひ」は計九回使われている。「悲哀を催させる情景そのものが極端に欠如、排斥されている」という三田村雅子の指摘[注3]は間違いないであろうし、それこそが先にも述べた『枕草子』の本質ともいえるものである。

また、この章段中の、

……五日の朝に、宮司に車の案内請ひて、北の陣より、「五月雨は、咎めなきものぞ」とて、さし寄せて、四人ばかり乗りて、いく。……　（上巻・二二三頁）

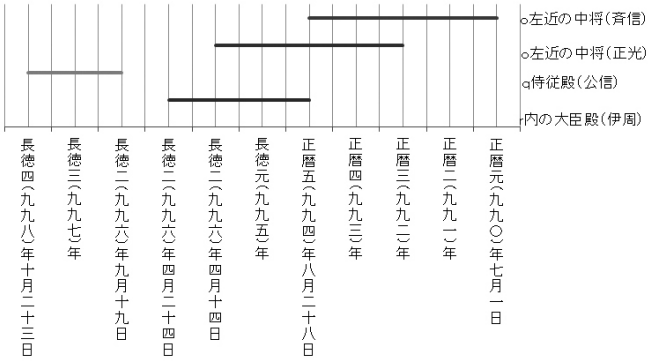
という記述から、ほととぎす探訪は五月五日に行われたものであることがわかる。五月五日は五節句のひとつ、端午と呼ばれる日で、邪気祓いのために簾や柱に薬玉を掛け、軒に菖蒲を飾る。節句という「明るい」行事が行われている日をとりあげているにもかかわらず、一般的な明るさには頼らない。あくまでも「清少納言自身が作り上げた明るさ」というものを使って「暗さ」を隠しているのである。

さて、ここで押さえておかなければならないのは、これまで述べてきた官職名の〝ずれ〟という現象が、今述べた『枕草子』の本質ともいうべき手法と極めて密接な関係にあるという点である。

改めて、【E】に登場する人物の官職名を確認してみよう。o「左近の中将」、p「明順の朝臣」、q「侍従殿」、r「内の大臣殿」の五人のうち、官職名が挙げられているoqrの就任期間は以下の通りである。まずq藤原公信が「侍従殿」であるのは、長徳二（九九六）年九月十九日から長徳四（九九八）年十月二十三日まで。r藤原伊周が「内の大臣殿」であったのは、正暦五（九九四）年八月二十八日から長徳二（九九六）年四月二十四日までである。o「左近の中将」については、従来次の二人の可能性が挙げられている。一人は、藤原斉信。もう一人

『枕草子』官職名の〝ずれ〟に隠された意図（内野）

【表五】



は、藤原正光である。藤原斉信が「左近の中将」と呼ばれたのは正暦元（九九〇）年七月一日から正暦五（九九四）年八月二十八日まで。藤原正光は、正暦三（九九二）年から長徳二（九九六）年四月十四日までである。もし仮にo「左近の中将」を藤原斉信と見るならば、三人の官職年代が一致する時期は存在せず、o藤原正光であったとしても、q藤原公信の就任期間と〝ずれ〟が生じることとなる（【表五】参照）。つまり、この章段は、どのように解釈したとしても官職名の〝ずれ〟を解消することはできないのである。

【E】「五月の御精進のほど、職におはしますころ」の段は、冒頭の一文を見ればわかるように、読者に対して年時が特定できるような書き方がなされている。それにもかかわらずこの章段の年時に関しては、研究者の間でも諸説があり、見解が分かれている。その根本的な原因は、今確認した官職名の〝ずれ〟にある。

『枕草子』という作品は、道隆死去後の章段では殊更に明るい表現や「笑ひ」という語を頻出させるなど、かなり徹底して暗さを見せないように描くという特徴を持っている。この特徴は従来の研究によってほぼ動かぬものとされているし、これこそが『枕草子』の本質であることはまず間違いないであろう。

興味深いのは、そうした『枕草子』独自の特徴と同じく、官職名の〝ずれ〟という現象もまた、道隆死去後を描く章段において、はじめて現れているということなのである。思えば、【A】「里にまかでたるに」の段でも、【C】「故殿の御服の頃、六月の晦の日」の段でも、さらには【D】「殿などのおはしまさで後」の段でも官職名の〝ずれ〟が認められた。そして、本節で取りあげた【E】「五月の御精進のほど、職におはしますころ」の段においても、同様の〝ずれ〟が認められるのである。つまり、こうした官職名の〝ずれ〟とは、道隆死去とともに没落していった中関白家の現実を隠そうとする『枕草子』の特徴・

本質に関わるものなのではないか。これが本論の結論になる。

この点については、もう少し具体的に述べておこう。

官職名の〝ずれ〟によって現れる効果とは、どのようなものか。まず言えることは、官職名がずれることによって章段の年時の特定は難しくなるという点にある。ただ、年時の特定が難しいと言っても、特定されたくないということではない。いつのことを書いたものなのかを完全にわからなくさせたいのであれば、「職の御曹司」という場所の指定や、「五月の御精進」のような時代・季節を特定できる文章を書く必要はなく、また登場人物についても官職名をつけずに名前のみで十分なのである。重要なのは、暗い背景をなかったこととして書いているわけではなく、あくまでも隠すことに重点を置いているということなのである。〝ずれ〟のある章段として例に挙げた【C】「故殿の御服の頃、六月の晦の日」の段や【D】「殿などのおはしまさで後」の段は、冒頭の一文が【E】と同様にかなり年時が特定しやすい書き方となっている。しかし実際は、本稿で見てきたとおり官職名に〝ずれ〟があることで年時を特定することは困難であった。だが、【C】【D】の二つに関して共通して言えることは、どちらも中関白家の栄華を築き上げた「殿（＝藤原道隆）」死去後の出来事を綴った章段であるということなのである。誰が読んでも中関白家の衰退期という暗い背景があったことが明白である。だからこそ官職名の〝ずれ〟という形をもって、暗い時期であることを意図的に隠しているのだとは考えられないだろうか。官職名の〝ずれ〟によって年時の特定が難しくなり読み手を混乱させる。さらに中関白家の没落という暗さと相反する明るい描写や表現を使って時代背景を隠す。これまで考えられてきた『枕草子』の本質と全く同じように、官職名の〝ずれ〟も暗い時代背景を隠す手段の一つであったのである。

四　おわりに

従来、官職名に〝ずれ〟が認められる場合、それは「作者の誤り」、あるいは「読者に理解しやすいように、あえて通称を用いた」がために生じたものだと考えられてきた。しかし、本稿の結論は、それらとは全く異なるものであった。

重要なのは、官職名の〝ずれ〟という現象が、なぜ、他でもない中関白家にとって重要な意味を持つ長徳二（九九六）年四月を境に見られるようになっているのか、ということなのである。

このことを踏まえた上で、もう一度【A】の場面を振り返ってみよう。

【A】里にまかでたるに、殿上人などの来るをも、やすからずぞ、人々はいひなすなる。いと有心にひき入りたるおぼえ、はたなければ、さいはむも憎かるまじ。また、昼も夜も、来る人を、なにしにかは、「なし」とも、かがやき返さむ。まことにむつまじうなどあらぬも、さこそはめぐれ。あまりうるさくもあれば、「このたび、いづく」と、なべてには知らせず、a左中将経房の君・b済政の君などばかりぞ、知りたまへる。c左衛門の尉則光が来て、物語りなどするに、「昨日、d宰相の中将（＝藤原斉信）のまゐりたまひて、『妹のあらむところ、さりとも知らぬやうあらじ。いへ』と、いみじう問ひたまひしに、さらに知らぬ由を申ししに、あやにくに強ひたまひしこと」などいひて、……　（上巻・一七四～五頁）

この章段を簡単に説明すると、清少納言の宿下がり中に訪ねてきた則光とのやり取りが描かれた章段である。やりとりの内容も清少納言の居場所についての問答だけで、一見華やかな場面のように見える。しかし、実際はそうではなかった。

この章段を読むポイントは、「里にまかでたるに」にある。清少納言が里住みをはじめた期間は長徳二（九九六）年の夏ごろから長期にわたると言われている。長徳元（九九五）年四月十日関白道隆薨去から始まって、長徳二（九九六）年四月の伊周・隆家左遷、さらに同年五月一日には中宮御所の二条北宮に潜伏していた伊周・隆家を追捕するという騒ぎまであった。そんな経緯があっての「里にまかでたるに」なのである。しかしそんな経緯があったことをこの章段は語らない。里居についての理由などについてもいっさい触れようとはしなかった。

それだけではない。清少納言は、この章段にある仕掛けを施していた。その仕掛けこそが、a「左中将経房」である。

彼女は、あえて事実とは異なる官職名を用いた。そうすることによって、読者を混乱させ、中関白家の没落という暗さを隠そうとしたのである。

これまでの研究で、『枕草子』の執筆はこの里居期間中に行われ、一応のまとまりがつけられたものとされている。その後も増補を繰り返して『枕草子』という作品は作られていった。

一家の没落を目の当たりにした清少納言が、その直後の里居中に『枕草子』を書き始める。嘘をついた『枕草子』を通して、清少納言は何を伝えたかったのであろうか。『枕草子』が隠しているのは中関白家の没落と、それにともなう暗さ、中宮定子の不遇である。その「暗さ」を隠しているものは「明るさ」や「笑ひ」である。しかし、「暗い雰囲気の中でも笑って華やかさを失わない定子の姿」を伝えたかったというわけではないだろう。本稿でとりあげてきた官職名の〝ずれ〟という問題だが、

これもまた「暗さ」を隠すための手段だと述べてきた。〝ずれ〟が生じるのは「暗さ」を隠した「明るい」章段に多い。つまり清少納言は、官職名の〝ずれ〟を意図的に用いることで、その「明るさ」こそが嘘だということを示していると私は考える。

『枕草子』跋文で、

この草子、目に見え、心に思ふことを、「人やは見むとする」と思ひて、つれづれなる里居のほどに、書き集めたるを、あいなう、人のために便なきいひ過ぐしもしつべきところどころもあれば、「よう隠し置きたり」と思ひしを、心よりほかにこそ、漏り出でにけれ。……

（下巻・二七六頁）

と書き記しているように、もともと『枕草子』は他人が見るかもしれないものと想定して書きはじめられたものである。殊更に明るい表現を使って描かれている章段に施された官職名の〝ずれ〟という仕掛けは、中関白家の没落という暗さを隠す手段である。ここからはわたしの想像、推測の域を出ないが、暗さを隠す手段であるのと同時に、中関白家の栄華が終焉を迎えたことで「暗さ」を全て背負って生きた定子の姿を浮き彫りにさせるための方法であり、『枕草子』を通じて清少納言が伝えたかった事なのではないだろうか。これこそが、清少納言が官職名の〝ずれ〟に隠した意図だったのである。

『枕草子』官職名の〝ずれ〟に隠された意図（内野）

※引用の本文は、『新潮日本古典集成』による。なお、引用本文中の（　）内の注記や傍線等は全て私に付したものである。

注

1　本稿で取り上げる章段数は、『新潮日本古典集成』に従う。

2　三田村雅子「回想の論理―「職の御曹司におはしますころ」章段の性格―」（『枕草子　表現の論理』有精堂　一九九五年）八一頁。

3　三田村雅子「枕草子の沈黙―「あはれ」と「をかし」―」（『枕草子　表現の論理』有精堂　一九九五年）一〇頁。

（うちの　みきこ・
平成二十五年度皇學館大学文学部国文学科卒業生）